

日本会計研究学会第 52 回関東部会（千葉大学、平成 16 年 12 月 18 日）

統一論題「会計情報の変容と市場の論理」の議論に参加して

東京にやって来て、初めて関東部会に参加した。テーマの「会計情報の変容」と「市場の論理」というタームをどのような意味合いで議論されるか、というに問題意識をもって。報告を聞いていて、特に「市場の論理」と（従来の）「会計の論理」とはどう接合するか、このことが気になった。

質問表が非常に少ないという声が聞こえたので、予定外であったが急遽、報告者の一人の多賀谷氏（金融庁）宛に「今日の企業会計の変容が、必ずしも会計理論の発展の結果でないとしたら（質問者はその感を共有しているが）、それは何の結果と思われますか。また理論の発展と言うとき、その『理論』をどのようなものとして見ておられますか」との趣旨の質問表を提出した。

懇親会で、報告司会の黒川教授（慶応大）、学会会長の安藤教授（一橋）、今福教授（日大）などから、小生の問題提起を受けてもっと議論を盛り上げたかったとお話をうかがった。どんな討論になっていたかと思うと大いに興味深いが、フロアーから別の質問などあって残念ながらこの質問に対する議論はそれ以上できなかつた。

以下は、質問の論点の一端である。要は、アカデミズムからの発信が、変容するプロフェッションをリードしているかという点であり、現実はその逆であるということ、今日の企業会計のあり方が理論発展の結果なのか、というかたちで問うたものである。

雑感：「市場の論理」と「会計の論理」とはどう接合するか

ー今日の企業会計のあり方は会計理論の発展の帰結かー

石川純治(04/12/20)

## I 「会計の論理」と「市場の論理」／会計評価か会計情報か

企業会計をこれまで支えてきた「会計の論理」、すなわち発生主義／費用配分／費用収益対応などの諸原則に支えられた配分ルールに基づく会計利益計算の論理の基底には動態論的会計思考がある。その思考のもとでは資産・負債の「評価」は、その「配分」のルールによって規定される。

問題は、もし理論の発展ということであるなら、統一論題での「市場の論理」とこの従来の会計の論理、さらには動態論的会計思考とはどう整合するかである。市場の論理、平たく言えば投資家の目を意識する、投資家の信頼を得るという観点からすれば、動態論的会計思考からでてくるバランスシートのあり方は、その観点とは必ずしも整合しない。少なくとも、適合しない面がある。資産・負債をダイレクトに測定した「情報」を投資家に提供開示するという今日の企業会計のあり方は、そうした動態論的思考の延長上では捉え

られない面をもつ。

## Ⅰ バランスシートとリアリティー／情報開示としてのB/S

バランスシートに実態・リスク開示を求める今日のバランスシート観は、明らかに動態論的思考からでてくるバランスシート観では応えられない。ここにその今日的不適合性がある。図式的には、「投資家の視点→市場の論理→B/Sでの実態・リスクの情報開示→動態論的B/S観の不適合」が想定できる。問題は、そうした今日的あり方は会計理論の発展の帰結かという点である。

会計思考の変遷を「①静態論的会計思考→②動態論的会計思考→③企業価値的会計思考」という図式で描いてみると、今日の企業会計には動態論的会計思考と企業価値的会計思考との併存と交錯の現実がみえる。したがって、仮にこの企業価値的会計思考が企業会計の今日的変容の基礎にあるなら、その理論的検討ぬきにしてそれを理論の「発展の帰結」ということはできないだろう。

## Ⅰ 「会計」計算と「情報」開示

今日の企業会計の1つの特徴は情報開示志向にある。それは従来の会計記録計算からでてくる開示とは次元を異にする面がある。もう少し言えば、「会計計算→開示」とは逆に「情報開示→会計計算」の規定が作用している。「会計的配分→資産・負債の評価」に対する、「資産・負債の直接的再測定（情報開示）→結果的な利益計算（会計計算）」という利益計算のあり方がその1つの現れである（包括利益概念もその1つ）。したがって、仮に今日の企業会計のあり方が理論の発展の結果というなら、この「記録・計算」と「報告・開示」の両者の関係（区分と接合）が理論的に検討されてはじめて理論発展の帰結といえるだろう。

## Ⅰ プロフェッションとアカデミズム／3つの「区分と接合」問題

今日の企業会計の変容ないし展開のもう1つの特徴は、その変容が理論的発展として登場してきたというより、新たなプロフェッションの会計として登場しているという点である。重要なことは、アカデミズムがプロフェッションの会計に埋没するのではなく、むしろそれを客体化、相対化することであろう。ここに、先の①「市場の論理」と「会計の論理」との区分と接合、②会計計算と情報開示との区分と接合、に加えて③プロフェッションとアカデミズムの区分と接合という問題がある。

（以上、2004年12月20日）